

## 平成30年度第3回三重県総合教育会議 議事録（概要）

- 1 日 時 平成30年8月21日(火) 9:30～11:00
- 2 場 所 三重県勤労者福祉会館 6階 研修室
- 3 出席者 知事、教育委員4名
- 4 議 題 学力向上について
  - ①平成30年度全国学力・学習状況調査結果の分析と今後の取組について
  - ②子どもの読書活動の推進について
- 5 主な意見 ○：教育委員、●：知事

<学力向上について>

- ①平成30年度全国学力・学習状況調査結果の分析と今後の取組について

○ 長いスパンで見ると、平成26年度以降効果が表れ改善している。学力向上に向けてできる取組はしているが、本年度が昨年度とよく似た傾向になったのは、管理職が1～2年で代わり若い教員も増えつつある状況下で、継続的な取組が浸透しにくくなっているのではないかと課題である。

課題が見られる「割合」の問題については、誤答を見ると、計算ができるが意味がわかっていない。理解に導くためには、余裕のあるカリキュラムが必要である。

地域の力をもっと活用するという事は大切な観点である。再任用や地域ボランティアの活用により、子どもたちの興味・関心を高める授業づくりに取り組むなど、地域の力に頼るような施策を考えていくことが必要だと思う。

○ 何のために勉強するのかという目的が明確に伝わっていないのではないかと。どうすれば全国平均を上回るかではなく、子どもたちが喜びを感じて主体的に学ぶためにはどうしたらいいか、視点を変えるといいのではないかと。何のために勉強するのかという目的が分かると、子どもたちもそれを達成するために自主的に取り組めると思う。

○ 学力が高まることの価値に対する保護者の意識改革が必要である。家庭学習の教材の認知度が十分とはいえず、保護者を巻き込んで根気強く発信し、しっかりと各家庭に届けなくてはならない。

少人数指導において平均的な授業では、理解力のある子ども

にとっても、苦手な子どもにとっても面白くないため、習熟度別指導の取組を推進することが必要である。また、テレビゲームやスマホは現代の子どもたちにとっては切り離せないツールであるため、技術革新を逆手にとってそれらを利用して楽しんで学ばせることも必要なのではないか。

- 継続的に取り組んできたことにより、平成26年度以降は全国との差が縮んできたと見てよい。

教員の取り巻く状況を改善する必要がある。子どもたちには繰り返し丁寧に教えるべきだが、教員にはやらなければならないことも多く、時間的にも厳しい状況である。現在の状況を脱却するためには学習内容は学校に、それ以外の部分は教員の時間を生み出すために地域の支援が必須の条件となってくると思う。

小学生は放課後に家族と過ごしている割合が高いが、どのように過ごすかが重要である。相手の意図を汲み取ることは会話のキャッチボールで養われる一面もある。また、新聞を読まない大人も増えている。読書習慣を身につけるための方策として、家族で一つの新聞記事を選んで議論してみるなど、新聞の活用も効果があるのではないか。家庭学習の具体的な例として紹介してはどうか。

- つまづきの箇所や原因は発見しているが、それを改善していくための取組が具体的に行われていない。子どもたちの習熟度別の状況や課題の分析が圧倒的に不足している。難しい問題を解けた子どもには、なぜ解けたか、できたことの楽しさを伝えていくことで自信につなげていける。子どもたちそれぞれにあった取組をすることで、学力の定着や活用する力の向上につながると思う。習熟度別指導ならやれる可能性があると思う。習熟度別指導のコース分けへの抵抗感があるのであれば、子どもたちにとってどのような環境で学ぶことがよいのか、県教育委員会や市町教育委員会でしっかりと議論する必要があるのではないか。

保護者に対しても学力向上に向けて、短期的なこと、長期的なことの両方の点から、子どもたちのためになることを浸透させることが大事だと思う。

## ②子どもの読書活動の推進について

- 学校の取組だけでは、読書が授業の一環と感じられ、子どもたちが読む楽しさを感じられず、継続的な読書習慣にはつながらないので、地域において沢山本を読む場所があるというのが

良い。尾鷲市の九鬼では、地域おこし協力隊が空き家を利用して古本屋を開業したりしている。また、子ども食堂とワンセットで本を読む環境をつくってみるのも良いのではないかな。

- 「朝の連続小説」という取組は面白いと思った。本の選定や読み聞かせを、教員ではなく、読書を親しんでいる知識の深い子にしてもらうのも面白いのではないかな。また、学校図書館の休日の有効な活用を考えてみてはどうか。保護者も一緒に行けるとなお良い。
- すばらしい取組が沢山あるのに広がっていないので、やり方に工夫が必要である。学校任せではなく、地域ぐるみで取り組んでいくことが重要だと思う。子どもが本に興味を持つきっかけづくりを大人がつくってあげなければならない。
- 読書環境の整備はできているが、きっかけづくりは進んでいない。自分の体験では、友人などと対話するうえで、これぐらいは読んでおかないと、という思いから読んだ本も少なくない。周りからの刺激、つまり子ども同士による横展開で、きっかけづくりが広がれば良い。
- 策を講じる中で、子どもたちの反応、表情、声が見えてこないことが問題である。また、司書や担任教員だけでなく、周囲のあらゆる人がこぞって読書を勧めるほうが、子どもの多様な興味に応えることができ、きっかけとなりやすい。自分のおススメの本を、子ども目線で、子どもの興味を引くように、どう紹介するかということでもある。なお、読み始めたものの面白いと感じられない場合は、無理して読み続ける必要はなく、再び読みたくなるタイミングを待つことである。

以上